

References

- Maekawa, F. 1955. Species problem and phylogenetic appreciation for diagnostic characters—A case of *Epimedium*. Journ. Jap. Bot. 30: 353-358. Suzuki, K. 1978. Biosystematic studies of Japanese *Epimedium* (Berberidaceae) (1) Variation of the populations in Shikoku. Journ. Jap. Bot. 53: 203-212, 225-231. —1981. Biosystematic studies of Japanese *Epimedium* (Berberidaceae) (2) Variation of the populations in Kyushu. Journ. Jap. Bot. 56: 9-16, 33-40.

* * * *

先に鈴木（1978, 1981）が報告した四国・九州におけるイカリソウ属集団の変異解析の結果から、ヒメイカリソウ (*E. trifoliatobinatum*) に1新亜種（シオミイカリソウ、新称）、*E. trifoliatobinatum* subsp. *maritimum* K. Suzuki を認め、またサイコクイカリソウ (*E. kitamuranum*) をバイカイカリソウ (*E. diphyllum*) の亜種とするのがよいという結論に達した。新亜種を記載し、2亜種の分類学的な扱いの論拠を記した。

□ Dassanayake, M. D. & F. R. Fosberg (ed.): **A Revised Handbook to the Flora of Ceylon. Vol. II.** 24×15 cm. 511 pp. 1981. Ameind Publ. Co., New Delhi. ¥7,500。1980年に出版された第1巻につづく第2巻である。これには10科の植物が載せられている。順に上げると、ヤクシマラン科、ラン科、ノウゼンカズラ科、ウキクサ科、フトモモ科、トベラ科、サクランソウ科、ヤマモガシ科、ヒルギ科、ジンチョウゲ科である。10科といつてもラン科以外は種類数が少なく、殆んど図がないので専門家以外はあまり興味を引きそうにないが、ラン科は380頁を占め、1種類ごとにきれいな全形図とくわしい解剖図がつけられていて、東アジアのラン科を調べるのには貴重な資料を提供している。コクランやカクラン、キンギンソウ、ネジバナなど広分布種を除いて日本との共通種は殆どないが、日本との共通属が多数あるのは意外である。クモラン属、オニノヤガラ属、オサラン属、イモネヤガラ属、ヨウラクラン属、クモキリソウ属、シュスラン属などセイロンから64属知られているうち29属は共通である。ランの好きな人には非常に参考になる本である。ラン科は野生種のみを扱っているが、他の科では栽培種も同格に載せている。したがってセイロンに野生しないユーカリ属も多数の種類が記述されている。産業上からはこれも大切なことであるが、種名の活字体を変えるとかして扱ってくれると使用上便利であろう。

(山崎 敬)